●交流内容

国語 伝えよう 音の響き

現場の実践紹介－❶

園児と児童の主体性を大切にお互いが学び合う交流を

言葉のリズムにふれながら、楽しい出会いの場に

幼稚園
品川区立
平塚幼稚園

人間尊重の精神に基づき、心身ともに健康かつ知的で感性に富んだ人間性豊かな幼児の育成を図ることを教育目標に掲げている。保育園児や小・中学生・地域のさまざまな人々との交流を積極的に取り入れることにより、人とかかわる力をはぐくむことに力をいれている。

園長●風間 美絵子先生
所在地●〒142-0063　東京都品川区荏原４丁目５番22号
園児数●66人（２クラス・２年保育）

小学校
品川区立
平塚小学校

確かな学力と豊かな人間性・社会性を育てることを目標に、小中一貫教育の推進や幼小の連携を計画的に行っている。また、全教員がチームを組んで指導や研究を行う体制をとることで、教育活動の質や教師の指導力の維持・向上にも取り組んでいる。

校長●岸 達也先生
所在地●〒142-0063　東京都品川区荏原４丁目５番31号
児童数●204名（7学級）

同じ敷地内に設置された平塚幼稚園と平塚小学校。交流を行う際に大切にしているのは、「子どもの主体性を大切にする」こと。５歳児と４年生という年齢の幅も大きい交流において、園児と児童それぞれが主体的に活動するには、どのような働きかけが必要なのでしょうか？

これまでの取り組み

平塚幼稚園と平塚小学校は、同じ敷地内に設置され、以前からイベントなどを通した緩やかな交流がありました。近年は、その取り組みが本格的になり、幼小の教員が共同で指導案を作成し合同の活動を行うなど、教育内容や子どもの発達の理解もできるような取り組みも行われています。また、平塚幼稚園には、小学校の先生が気軽に立ち寄って相談できるようなスペースもあり、子どもたちの日ごろの様子を話し合うことも頻繁に行われています。

今回の交流活動について

今回の交流は、互いに初めて出会うことになる５歳児と４年生が、まずは出会いの場を楽しむことを共通のねらいとしました。さらにそれぞれに次のようなねらいをもって、交流をしています。

《５歳児》
- 小学生の先生やお兄さん、お姉さんに親しみをもつ。
- 小学生の群読を聞き、雨の降る様子を自分なりにイメージして楽しむ。

《４年生》
- 幼児に情景が思い浮かべられるように強弱や速さ、リズムに気をつけて詩を群読する。
- 幼児が考えた豊かな音の表現の仕方を知り、心を豊かにする。

交流授業までの取り組み

５歳児

「あめ」の歌や実際の雨の音にふれることで音や表現の多様さに気付く。

５歳児は「あめ」の歌を小学生に聞いてもらうことになりました。それまでに、雨天のときに傘をさして園庭を散歩し、傘や木の葉、遊具にあたる雨の音を感じたり、水たまりの様子を観察したりすることで、雨を実際に体験する機会を何回か設けました。園児によっては、雨の強さや、立っているときとしゃがんでいるときでは、雨の音が異なることに気付いているようでした。

小学４年生

発表したいという気持ちを大切に詩の群読を練習する。

４年生は「てるてるぼうず」「あめ」のふたつの詩の群読の練習をしました。誰に発表をするかについてみんなで話し合い、今まで発表を聞いてもらったことのない身近な存在として、隣設園の園児に聞いてもらうことに決定しました。「幼稚園の子にもわかりやすく伝えるにはどうしたら？」と話し合い、朗読の強弱や速さを工夫しました。

当日の様子

日時：2008年６月25日（水）
場所：小学校　図書館

あいさつをしてから、園児はゴザの上に着席

11:00

あいさつを交わして着席。小学校の先生から「今日は、きりん組（５歳児）と４年生が一緒に国語のお勉強をします」と言われると、背筋がしゃんとする子も。

いよいよ交流の当日です。幼稚園の先生は園児に「今日は４年生がすてきなものを聞かせてくれるみたいだよ。どんなものかな？　ポイントは『雨』だって」と伝えます。
園児がワクワクした表情で小学校の図書室に入っていくと、そこには４年生のお兄さん、お姉さんが待っていました。

11:10

４年生の群読をじっと聞く園児たち

群読を聞くという初めての体験に、園児は真剣なまなざしで４年生を見つめています。４年生は、先生の指揮に合わせて、強く弱く、速く遅く詩を朗読していきます。指揮をする先生を振り返って、じっと見つめる園児もいます。

群読を聞いて、どうでしたか？

「すごかった！」
「言葉が速かった」
「なんか、不思議な感じがした」
「声がそろって、きれいだった」
「言葉がおもしろかった」

幼稚園の先生が「雨の音はどんな音かわかった？」と尋ねると、園児たちは「ざんざか…」「ざんざん…」と答えました。迫力を感じているようです。次に、「雨の日のお散歩に行ったときはどんな音が聞こえたかな？」と尋ねると「ぽつぽつ」「ざーーっ」「ぴっちゃん　ぴっちゃん」などと答え、４年生の群読に出てきた雨の音の表現との違いを感じているようです。今度は幼稚園の先生が４年生に「『ざんざか』とは、どんな雨なのかな？」と聞くと、「激しい音」という答えが返ってきました。その答えに「ふーん」と納得する園児もいます。

２回目の群読を聞く

「どんな雨が降っているのか、想像しながら聞いてみようね」

群読を２回聞いた後に感想を尋ねると、園児からは雨の世界をより広げた、具体的なイメージの言葉がたくさん出てきました。「今日は幼稚園で感じているのとは違う、雨の世界に来ることができたね」と言うとうなずく園児たち。

「工事現場にいるみたいな感じがした」

「最初は雨がちょっとだけ降っていて、だんだんたくさん雨が降っているようだった」

11:20

ぴちぴち
ぱしゃぱしゃ

「あめ」の歌を発表する園児たち

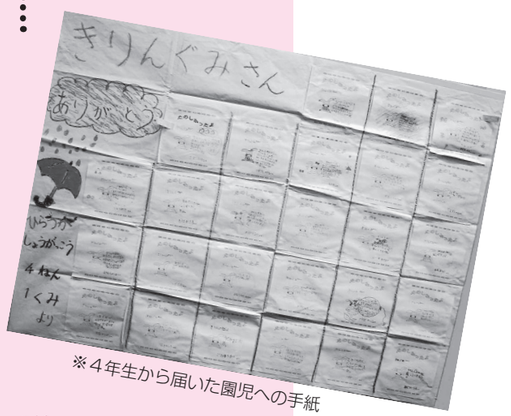
次は園児たちが「あめ」の歌を発表する番です。歌う前に幼稚園の先生が４年生に「歌の中に出てくる『雨の音』の表現を後で発表してもらいますので、よく聞いてくださいね」とねらいを伝えますが、歌い終わってから尋ねても反応がすぐには返ってきません。もう一度園児が歌うと、「ぴちぴち？」「ばしゃばしゃ？」など、少しずつ発言がでてきました。園児たちもうれしそうに「あたり！」などと拍手をしています。また、「弱い雨」「やさしい雨の感じ」という感想もありました。

11:30

お互いにお礼を言い、４年生と手をつなぎ園まで送ってもらいました。

その後の交流

今回の交流の後、園児のもとには、４年生からお礼の手紙が届きました。「楽しかったよ」「歌、じょうずだったね」「また遊びに来てね」という温かい言葉が並びます。今までは、同じ敷地内にあっても、園児と児童の交流は少なかったのですが、今回の体験をきっかけに、休み時間に４年生が幼稚園に気軽に遊びに来たり、人とのかかわりに抵抗を感じていた児童が緊張せずに園児に笑顔でかかわったりするなど、小学生にも変化が見られるようになっています。



※４年生から届いた園児への手紙

幼稚園の先生から

幼児は「雨の音」を雨の日のお散歩で実際に聞き、幼稚園での「あめ」の歌や４年生の群読を通してさまざまな言葉の表現にふれることができました。この体験が言葉への興味につながっていけばと思います。また、何よりも、４年生の迫力あるリズムの群読を聞いて、幼児は素直に「すごいなぁ」という感覚とともに、あこがれを抱くことができたように思います。このような小さなあこがれの積み重ねによって、小学校へのあこがれの思いを膨らませていくのだと思います。

平塚幼稚園　きりん組　担任
山本 淳子 先生

小学校の先生から

４年生は群読を幼児に聞いてもらう場で練習の成果を出すことができましたが、幼児の歌を聞いた感想を表現することは、残念ながら十分にできませんでした。この学級の児童は、伝えたい気持ちはあっても声に出そうとすると小さな声になってしまう傾向があります。しかし、このような交流を通して、「聞きたい」、「伝えたい」という思いが少しずつ高まっています。最近では自分から「幼稚園に行きたい」と言う児童が出てきました。今、4年生が泥だらけになりながら幼児と遊んでいる姿を見ていると、今後の交流が楽しみでなりません。

平塚小学校　4年1組　担任
浅原 有果 先生

交流の事例からの考察

幼小連携を行う際、交流の内容や方法はさまざまあります。しかし、今回の事例のように「雨」という共通のテーマをもち、それぞれの発達に即した教材を選定し、同等の立場で交流することは、学び合うという視点から大きな意味があります。どちらか一方が受け身の立場にならないことで、互いに相手を尊重する気持ちを高めているのです。

また、交流にあたっては、幼児も児童も自分の「めあて」を明確にもって参加できるようにすることが大切です。幼児も児童も初めての体験ですので、教師の意図する方向にはなかなか進まないこともありますが、例えば、群読や歌を聞く前に「雨の音を見つけよう」「何を想像したかな？」というように、めあてがもてるようにすることで、子どもたちは年齢にかかわらず意欲的に活動に取り組むことができ、成果も大きなものになります。

このように、幼児、児童とも、主体的に活動し充実感を体験すると、その体験を原動力として、教師が設定しなくても自主的に交流を進めるようになってきます。このことには、幼稚園と小学校の立地条件の影響もありますが、それよりも子ども同士の気持ちのつながりが大きいことがわかります。

（ベネッセ次世代育成研究所顧問・磯部 頼子）